

# 「<sup>いちし</sup>壺師の花」の謎

路の辺の 壺師の花の いちしろく  
人皆知りぬ 我が恋妻を

(卷十一—二四八〇)

—路のほとりの壺師の花のようにはつきり  
と人はみんな知ってしまった。

私の恋しい妻を。

壺師の花には多くの謎が秘められています。そもそも、これがどんな花な

のかということすらわかっていません。これまで、クサイチゴ、エゴノキ、ギシギシなどさまざまな候補が出されてきました。今のところはヒガンバナが最も有力な説のようですが、「いちしろく」という言葉に「白」というイメージを持たせ、単に著しく目立つ花ではなく、白い花なのではないか、という解釈の別がその同定を難しくさせています。目立つ花であると詠まれているにも関わらず『万葉集』には右の一首しか収められていないことも、壺師の花がもつ謎のひとつです。

そんな謎の花・壺師は、鎌倉時代のごく限られた期間の、ごく限られた人々たちによって歌に詠まれることがありました。『現存和歌六帖』(建長二年へ一二五〇)の成立の二九一、『新撰和歌六帖』(寛元元年へ一二四三)の同二年の詠出の二二二・二二二・三・二二一五の四首の歌がそれです。なぜ、壺師の花を詠んだのでしょうか。その疑問を解くヒントとなるのが



飛鳥寺近くに咲くヒガンバナ

歌集の性格です。いずれも類題和歌集であり、題は『古今和歌六帖』(貞元・天元へ九七六〜九八二)頃の成立に倣っています。『古今和歌六帖』に「いちし」という題があるために、壺師の花を詠んだと考えられます。

ただし、ここで注意しなければならぬのは、壺師がどんな花なのかという点まで理解して詠んでいたわけではないということですが、あくまでも鎌倉時代に顕著にみられる万葉歌の本歌取りを行ったにすぎません。ですから、

鎌倉時代に詠まれた和歌を通して壺師の花を理解しようとしても、それは誤った解釈を導くことになるのです。

その傍証となるのが「いちし」という題の捉え方です。『古今和歌六帖』の「いちし」の題には冒頭の万葉歌とほぼ同じ歌が所収されていますが、実は同題にはもう一首、歌が収められているのです。それは「大原のこの巖柴の何時しかと我が思ふ妹に今夜逢へるかも」(『万葉集』巻四—五二二)という万葉歌です。しかし、この歌は壺師ではなく、巖柴(市柴)を詠んでいます。すなわち、壺師の花が『万葉集』独自の言葉となっているために、「いちし」という題のもとで壺師と巖柴とが区別できていないと考えられます。壺師の花は、はつきりとしている様子を示す歌語ですが、平安時代の人にとっても、鎌倉時代の人にとっても、もちろん現代の私たちにとっても、まったく「いちしろく」ない花なのです。